

教員2年目に初任校の教頭先生から、その後の教員人生の道筋をつけていただいた私は、3年目も学級通信を発行し、年間80号ほどになった。今度は製本しても背表紙にちゃんと文字が入るほどの厚さにはなった。

その後、人間万事塞翁が馬の如く、なぜか中学校に赴任してしまった。それも3年生担当だった。小学生から中学3年生へとジャンプアップとなり、さすがにめまいがした。期待1不安9の割合であった。そのような状況の中で、自分にもやれることは何かと考え、学級通信を出すことにした。年間100号出すことを目標に定め、週2～3回のペースで出していった。あの当時は、B4判1枚をワープロで打っていた。

2週間ほどが経過し、週に2～3回のペースならば、何とか続けられるという手応えを感じていたところ、同じ学年に毎日B5判1枚の学級通信を手書きで出している先輩の先生がいらっしゃることがわかった。その先生は、私よりもちょうど10歳上の同じ国語教師だった。学級通信のタイトルは「こぶしの花」となっていた。私の初任校の玉川第一小学校の校歌に「こぶしの花」が出てくる。その先輩の先生と話していると、何と玉川第一小学校に勤務したことがあるというではないか。その先生は私と同じように小学校から中学校へと移った方だったのである。

玉川第一小学校のときも中学校でも学級通信を毎日出している先輩教師の姿を目の当たりにし、自分もいつか毎日学級通信を出せるような教師になりたいという思いを抱くようになった。結局この中学校にいる間は、毎年100号を出していた。毎日出そうと思えば出せたとは思いますが、同じ学校に勤務している間は、学級通信を出すという取り組みに差が生じてはいけないという思いから、年間100号にとどめていた。

私の憧れの先輩国語教師となった学級通信「こぶしの花」の先生は、1年で転勤してしまった。3月末の慌ただしいときに、私はその先生に「学級通信『こぶしの花』をいただけませんか」とお願いしてみた。その先生は、製本はしていなかったが、ファイルに綴じたものを快く私にくださった。そのファイルは、今も私の自宅に大事な宝物としてとってある。その先生とは、その後もお付き合いが続き、今もお世話になっている。その先生がロードレースに出ているというので、何人かで一緒にレースに出ていた時期もあった。その先生が、南会津に教頭で赴任したときには、ご自宅に宿泊させていただき、一緒にスキーに行ったものである。

職場でご一緒させていただいた期間は、たった1年間だが、出会いとは、期間の長さではないと思う。1年間で、どれほどの影響を受けたことか。国語の授業も参観させていただいた。中学校の国語の授業というものを模索していた私の前で、見事な授業が展開されていた。すぐにはできないかもしれないが、そのうち自分もあういう授業がしたいと思ったことを覚えている。今でも、教材の名前も、だいたいの授業の内容も覚えている。授業を見て「すごいなあ」とは思ったが、なぜああいう授業ができるのかは、あの頃の私はわかってはいなかったと思う。今ならば、深い教材研究とそれに裏打ちされた発問によって展開されていたということがわかる。

授業は何の派手さもなく、いたってシンプルなものであった。しかし、そこには今でいう「深い学び」があったはずである。私が勤務したあの当時の中学校は、お世辞にも落ち着いている学校とは言えない状況だった。それでも、生徒が国語の授業で考えているのである。生徒が考えたくなるような発問があり、日々の授業の積み重ねが生徒を変えていったのだと思う。知的におもしろい国語の授業だったのだと思う。私にとっては、魔法のような授業であった。